

永遠の序曲としての生涯

日本キリスト教団佐伯教会

牧師 山崎 英穂

(佐伯・中村北町)

ひとりの人間であっても、関わる相手によって接し方がちがうであろう、むしろちがわねばならない。だからひとりの人間に対する見方もひとりひとりちがっている。そこにいのちがあるといえるであろう。

過日、七十七年余の地上の生涯を終えて召天された羽柴弘氏というひとりの人間に、どれだけ多くの人が出会い、関わってこられたことか。そのひとつひとつの出会いと愛の関係は、それぞれ個性的独自のであり、それ故限りなく重く尊いであろう。その出会いと関わりは結晶として、羽柴氏というひとりの人間の形成と生涯の業績がある。そしてその生涯の仕事や業績については、あらためて私が述べることもなく、多くの人の認めるところである。

しかし羽柴氏の生涯を考える時、この一点をぬきにしては考えられないということがある。それはキリスト教

信仰、むしろイエス・キリストとの出会いである。愛唱讃美歌のひとつに、「わが魂の慕いまつるイエス君のうるわしさよ」(五一二番)というのがある。口先や頭の中ではなく、魂のどん底において、羽柴氏が生涯慕い求めたのは、イエス・キリストであり、その救いであった。

その根底にあるのは、幼なくしてご両親を不慮の事故で失われたことであろう。その若い魂に深い悲しみを受け、何か永遠なるものを求める心が植えつけられたのであろう。十九才の時自ら洗礼を受け、まもなく弟の道明氏を洗礼にまで導びかれたのである。そして多忙な生活の中で、佐伯教会の中心的信徒また役員として、教会を支えてこられたのである。

お葬式の日、ご自宅へお迎えに行く時たまたま乗ったタクシーの運転手が、「羽柴先生にはたいへんお世話になったことがある。先生はクリスチャンだったんですね」と感慨深く言われたのが印象的である。多くの人との関わりの中で、キリストのかおりを放ってこられたのである。

羽柴氏にとって七十七年の生涯は短く、やり残された仕事も多く、残念に思われたことであろう。あるいは私

たちの交わりも、断片的であり一面的であり、破れがあるかもしれない。しかし、人生は永遠への序曲であり、仕事も人間の交わりも、神によってしか完成されないものであるということ、私たちに語りかけておられるように思われるこの頃である。

羽柴君を悼む

平 田 幸 市

(賛助会員・佐伯市太平区)

佐伯史談会の至宝的中心人物だった羽柴弘君は、昨秋十月十九日逝去された。悼みても詮なき事ながら、惜しい人を失った事と心から悲しんでいる。

私は君の少壮学生時代から、その性行業績を知悉しているものの一人だが、それにしても特にこの史談会発足当初以来三十余年に及ぶ間、君は献身的に終始一貫その運営に奉仕され、今日この堅実な地歩を占むるに到らした。その熱意努力に対しては感謝の言葉もない。

年間六場所、場所ごとに技能、敢闘、殊勲の三賞を以って、その健闘を称揚する日本相撲協会の如きがあれば、その三賞独占の榮譽を受くる者、それは羽柴弘である。

性格、特技、根気、脚力、研究、探訪何れも凡人の及ぶところではない。

軌道に乗ったわが佐伯史談会は、この強固堅実な基調を益々向上發揮せしむることに、一層の奮励努力、しかして羽柴君の遺業に報ゆべく精進しようではないか。

羽柴先生と私

佐 脇 貫 一

(会員・佐伯市長良)

佐伯史談会と羽柴先生、その羽柴先生と私、思えば二十数年来のお付き合いであった。

私は、戦前・戦中・戦後にかけて新聞生活をしていたが、地方版の編集記者だったため、外地には行かずほとんどが内地勤務であった。しかし、取材・連絡などの要事もあり、門司・大分では空襲にあい身体一つで避難した経験もある。敗戦、私がやるせない不安と不満にさいなまれて毎日新聞社を辞め、郷里佐伯に引上げたのは昭和二十一年春であった。幸い農村に縁者が多く、いささかの農地を持っていたので、食糧に苦勞することはなかった。そのため二十二年から友人たちと佐伯市内で地方